

動や軍隊における経験などを聞く機会を得た。この映画は彼らから聞いた当時の時代の雰囲気と見事に符合しており、そのリアルさにおいて他の韓国映画を圧倒している。多くの韓国映画やドラマはテーマの1つとして朝鮮戦争やベトナム戦争への従軍による別れを直接的に描いているし、兵役はラブストーリーでも必須の題材となっている。しかし、そこで描かれる描写は何か薄っぺらさを感じ、この映画の間接的でありながら、リアルさを示した描写とはかけ離れている。この相違はこの映画の表現力の強さを反映しているといえる。

この映画のハードな側面ばかり述べてきたが、この映画の多くのシーンは韓国の一般的な田舎の雰囲気やそこにあふれるユーモアの描写に割かれている。その象徴がファーストシーンとラストシーンで描写される畑のど真ん中の殺害現場である。この殺害現場のシーンはこの映画が都会の一部の地域において起こりえたことではなく、多様な面で過渡期であった当時の韓国社会のどこにでも起こりえた事件であることを納得させる。そして、こうした描写が非現実である連続猟奇殺人の恐怖感を際立たせ、犯罪に対する嫌悪感や現場捜査官の葛藤に対する観客の共感を与えているのである。

この映画はテーマがテーマだけに見ていて楽しさばかりを感じられる作品ではない。しかし、多くの日本映画が陥っている「説教くささ」だけが残る作品ではなく、エンターテインメント作品として十分に成立している。韓国映画は「シュリ」「JSA」などを経て国際的に通用するエンターテインメント性を十分に身に付けており、そうした段階を経たからこそ実現可能であった作品であり、私はこうした映画が興行収入1位となる韓国の映画産業をうらやましく感じる。私も昨年日本で興行収入1位となった「踊る大捜査線」は大好きな作品であるが、韓国と日本の映画産業のレベルの差と観客のスタンスの違いに愕然とした。

現在、「冬のソナタ」がNHK地上波で放映され大ヒットしているが、「冬のソナタ」で関心を持った皆さんもぜひこの作品を見てほしい。新たな段階に達した韓国エンターテインメント産業の

現状が垣間見られるはずである。

「冬ソナ」と韓国大衆文化開放

現代中国学部

藤森 猛

韓国の大衆文化開放

1998年10月のキム・テジュン(김대중)大統領によって始められた第一次「日本文化の開放」が2004年には第四次開放の段階に至り、日本の映画・ビデオ・出版・歌謡曲・アニメーション・演劇などの大衆芸術文化が次々と韓国において一般公開されることになった。同時に韓国からも映画・歌謡曲・テレビドラマなどの多くの作品が日本に流入し、日本をはじめ中国・台湾・東南アジアなど多くの地域で「韓流」と呼ばれる韓国の大衆文化の一大ブームが起こっている。

まず映画においては、93年『風の丘を越えて』(서편제)の公開に始まり、『八月のクリスマス』(8월의 크리스마스)、『シュリ』(쉬리)、『接続』(접속)、『JSA』、『友へ チング』(친구)、『春香伝』(춘향전)などの作品の公開で、韓国映画作品の大ヒットが続いている。言うまでもなく、2002年の日韓W杯(ワールドカップ)開催が日本における韓国ブームに火をつける契機となっている。

一方、ドラマにおいては、日本における2003年からの『冬のソナタ』(겨울연가)のNHK放映が契機となり、熱狂的な韓国ブームが引き起こされ、2004年4月、主演男優のペ・ヨンジュン(배

윤준)の来日による“ヨンさま”ブームが社会現象とまでなっている。

「冬ソナ」現象

テレビドラマ『冬のソナタ』は、高校時代の初恋物語が、主人公の男性の事故死によって終わり、それが10年ほど経った後に再びそっくりの容貌を持った男性が現われて恋愛が再開するという設定でドラマが進んでいく。主演のペ・ヨンジュンとヒロインのチェ・ジウ(최지우)が、出会いの場となったチュンチョン(춘천)やソウルのロケ地が観光スポットとなり、韓国国内をはじめ日本・中国などの“冬ソナ”ファンが押し寄せている。

『冬のソナタ』がブームを引き起こした要因は、様々な視点から意見が述べられている。まずドラマの中で過去・現在・未来の恋愛の姿が描かれる中で、60年代から70年代の日本のテレビドラマや映画に描かれたほのぼのとした純愛ドラマが描かれている。これに加え、ドラマの舞台となった高校の古ぼけた放送室の建物、あるいは主人公の二人が初めてデートをした木立や雪原といった韓国の美しい自然が物語のイメージを高めている。

次に物語では、主人公の度重なる事故や死、偶然の出会いなどが繰り返され、日本のドラマでは考えられない急展開のストーリーとなっている。これは韓国のドラマが現在量産体制にあり、激的なドラマの視聴率競争にあることが一因といわれる。一本あたりのドラマ制作の時間に制限のある中で、キャストには高度な演技力が求められ、またシナリオは視聴者受けするドラマ展開が求められ、“ぶっつけ本番”で撮影現場においてシナリオが修正されることも多いといわれる。韓国では通常の日本のドラマ制作にみられるように、長期のロケ期間・制作期間において、複数のシナリオの中から俳優の演技やセリフを取捨選択して決定する方法が必ずしもとられていない。こうして、ドラマが視聴者にとっては、“はらはら、ドキドキ”の連続となり、画面に惹きつけられる一因となっている。

「冬ソナ」と「キャンディ」

テレビドラマ『冬のソナタ』がヒットしたもう一つの大きな要因は、物語におけるキャラクターの構成にあるといわれる。登場人物のうち、ペ・ヨンジュンとチェ・ジウが純愛ドラマを形づくの中で、視聴者は一方で、助演男優のパク・ヨンハ(박용하)の暖かな愛情に支えられ、一方で助演女優のパク・ソルミ(박솔미)の“継子いじめ”的な攻撃にさらされる。この“善悪の両天秤”の中で主人公の恋愛がドラマチックに展開する。非常にわかり易い登場人物の設定は、最近の日本のテレビドラマでは見られなくなっている。

『冬のソナタ』を熱狂的に支持したのは、韓国においても日本においても30~40才代の女性であるといわれている。日韓における30~40才の世代は、60~80年代の少年・少女時代にアニメーションを多く見て育った世代である。韓国においては、日本の大衆文化が開放される前の時代である60年代~80年代にかけて、例外的に日本のアニメーションが放映され、『鉄腕アトム』(우주소년아톰)、『黄金バット』(황금박쥐)、『マジンガーZ』(마징가Z)などの科学・SFアニメをはじめ、多くの日本アニメが韓国のテレビで放映されてきた。特に70年代~80年代の少女アニメ『キャンディキャンディ』(캔디캔디)はコミック本としてもテレビアニメとしても韓国の少女たちの圧倒的な支持を得たことは、日本の状況と共通している。

『冬のソナタ』で悪女役を演じたパク・ソルミの“チェリン”役は、まさに『キャンディキャンディ』の中の悪女“イライザ”役のキャラクターであり、徹底して主人公の女性チェ・ジウをいじめ抜いている。このことが多くの女性心理を主人公への共感へ結びつけるものになっている。

かつて中国をはじめアジアで空前の大ヒットを記録した中国歌劇・映画『白毛女』、日本映画『君よ憤怒の河を渉れ』(中国名『追捕』)、日本ドラマ『おしん』(中国名『阿信』)や山口百恵の一連のテレビドラマなどは、すべて主人公の女性が貧しい境遇に設定されている。また同時に常に主人公を追いやる悪役がいることもこれら

の作品には共通している。『冬のソナタ』のヒットはそのようなストーリー展開をドラマに求める東アジアの人々の心理が反映されているともいえる。(本文執筆にあたっては李周遠さんの協力を得ました。)

Estuary English 近頃の若い者の英語

経営学部
安藤 聡

「河口英語」(Estuary English)とは英国の言語学者デイヴィッド・ロウズウォーンの造語であり、主にイングランド南東部の中産階級の若者が話す英語を指して言う。ロンドンからテムズ河口にかけての地域で最初に聞かれたことからこのように命名された。しかしながらロウズウォーンがこの新語を発表したのは1984年のことであり、初期河口英語世代は既に五十代に突入している。最近ではテムズ流域に限らずかなり広い範囲で若年層を中心に河口英語が話されるようになっていて、また中産階級ばかりでなく例えば上院議員の中にもこの種の英語を話す者がいる。「クイーンズ・イングリッシュ」を体現するはずのエリザベス女王の発音にさえ、河口英語の影響が認められるようになって来たという(御園 2004)。このような英語が発生した背景には、ロンドンから郊外へ移住する人口が増加し、ロンドン方言とケント州やサリー州あたりの RP (もともとこれらの地域には RP 話者が多かった) が混合したことがあ

る。

河口英語の特徴はおよそ以下の通りである。

(1) 語尾や音節尾の子音 'l' が 'w' の音になる：

例えば 'fall' は「フォール」というよりも「フォーウ」に近くなり、'milk' は「ミウク」と聞こえる。但し 'light' や 'lord' などの語頭の 'l' は普通に 'l' として発音される。これは標準英語 (Received Pronunciation. 以下 RP) における「曖昧エル」(dark 'l') がより曖昧化したために 'w' のように聞こえるということである。語頭の 'l' は「明瞭エル」(clear 'l') なので決して曖昧化しない。

(2) 語尾や音節尾の子音 't' が声門閉鎖音 (glottal stop) 化する：

声門閉鎖音になるということつまり、実際には音を発しないということであり、'it' は「イッ」、'out' は「アウッ」、'butter' は「バッター」と発音される。ロンドンの南にある空港 Gatwick は河口英語では「ガッウィック」、'フットボール' は「フッポーウ」になる。この傾向は特に若年層に顕著であり、このような発音は伝統や体制といったものに対する無意識の反逆とも考えられている (Coggie 1993)。'twenty' を「トウエニー」と発音するのは米語的な印象があるが、河口英語でもそう発音される。

(3) 語頭の 't' はより強く息を吐き出して発音される：

RP はアメリカ標準発音 (GA) と比べてもすべての 't' 音を強く発音する傾向があるが、河口英語では語中や語尾の 't' が発音されない一方で、語頭の 't' はいっそう強く発音される。そのため 'take' は「チェイク」、'tell' は「ツェウ」と聞こえる。

(4) 長母音 [i:] が二重母音のようになる：

例えば 'me' が「ミー」ではなく「メイ」に近くなり、また(3)の特徴と相まって 'tea' が「ツァイ」と発音される。

(5) 子音の後の 'y' 音が脱落する：

「ニュース」(正しくは「ニューズ」)の語頭の子音 'n' の後には 'y' の子音がある。発音記号ではこの音は [j] で表されるが、この [j] 音を脱落さ